



1278
12

朝夷巡嶋記全傳第三編卷之二

東都 曲亭主人編輯

中輯第廿二

友引弓小松の宿

同上

村田

朝夷三郎義秀ハ江三廣光を伴ひて、義邦の迹を慕ひて、加賀の小松と
あら當ふらどくれど廣光ハ巣裏ハ嶋室平が夥兵ホシ柱にてえ左の殿
薄傷を負ひて、させ瘡もあづれハ義秀又ハ告げ。又信濃路ゆアヒ
より漸く小腫き痛多く、劣の運び、自由あづど、あつろ頻ひ焦躁のまゝで見
ましめうけり。義秀ハこのとを、廣光が金瘡をもじめ、知りて敵駕に焉とひ
かれてゐて、義邦が追著みて、とおりぬく。有繫え捨てたまひをば或ち
勦り或は激。技抜くや筋ふ思ひの外、宿りをかき残く、小松の御まで來られ

とも佐味坐内ハ兼倉か召使まく。今この里より去る。小義邦も亦りまく。後まく人を其妙よ俟へ死。あれども井平ハとくづ心利きものあり。往來里より旅宿。俟てりや。ところひづ兩人道次よりつゆく。あまぐのものを相譚ふ。小義秀ハ去歲の九月。この地より遊歴あまく。且くまよ足田。冠者の旅宿を尋ん。里盡れあう客店より。且くまよ足田。冠者の旅宿を尋ん。里盡れあう客店より。やぶ廣光が金瘡より膏藥を打せ。兩三日保養させ。毎日小街頭より。彼此を徘徊。彼人を索。小義邦より井平事。面影似て。人ふごもぬ遭ひ。その次の日も晨明く旅宿を立ち出る。里の圮橋をうち渡す。申明亭の邊を過ぎ。目今新しく掛けろ。あべ。高牌の下ふ人の骨相書。三四枚貼たるを里の老弱略く全入。乃んとく其處より集合。肩を比べ財を連ひ。蝶の甘み附よ似く。

義秀ハ更の形勢。うろかすのあり。あむね。衆人の後方より。筆を掲げてこれをうる。この骨相書ハ別人なり。と。義邦主役と井平。とうふがさく。写し出。罪科の題を記して。あ。搦捕く進む。如此。この賞禄をとる。せん在処を知る。訴稟さぶ。同類あり。とも。身の咎を宥免して。これも賞禄を賜。と。鮮やかに書く。原来。うぶ人あり。けれども騒ぐ氣した。さう。さうぬかるく立退。足早に旅宿より。廣光が同様。こと。更の趣を密語。廣光。うち驚け。うぶ人患ひ。足。と。対者ハ何故。在まと。やう。やう。と。あを限り。あを。加口以。朝夷め。和君。えふ。更あ。腑を噬。とも。及ひ。某を。うち捨置。疾院。う。と。う。義秀。ゆく氣。う。も。そと。謂。口誼。あ。和殿が。金瘡の。いえ。え。も。いえ。愈。進退不便。あき。巴とも。うち捨て走る。あ。足利。矢石と犯して。

りうど和殿を敵へばた勇士ハ元を喪ふて成忘をもとさまび命も義
よりて鴻毛トロ輕ひべ。今更驚くとえとうと自ふ激せば廣光感
狼を拭ひあひどかくやそひりうる然かのがあらうのやくみせば君が仁義と云
ねふ猶う無れどとく共六侶みちよすをもんハ窓て危しのふせきと當
惑の小頸を雲々時傾きふ義秀ハ火死る。由代解を後方をアシテ
長談ハ憚王あり。所詮和殿を枝披く越中帰負の岩神ある。稻向
判五ヶ宿所ヤダ退くべ。又ヨリ切ふ。媪子井平ハ思慮ありの佐味が
この地ニ至るどと曾ふ冠者少俱く虚くとすくら不逞苗とぐもわざ。
何とあれが。夜う。和殿ハ一人畠アモ領主の討兵を引受す。あく
その初う。和殿の存亡ハ定く。又義秀が和殿を敵あく共ふ迹うる來
るとあふねが久くこの地ニ候ベタモ倘彼貳二郎を傳遣せし。和殿の

内室流良井じみ途ふ冠者ニ追著ふ。口が口状を必傳人繋あぐ
吉見殿との小松へ趣ふ。井平ホ僉共侶ニ稻向許落是く。吾們を
俟ふ。あん是も亦知るべ。とくもあれ追捕の沙汰嚴重あれ。六
今ハ露妻時も單りゆ。只義秀ふうち任へ。とく出立へ。とりそがせ。廣光この
議よ後ひく苦痛を忍びて行裝と。その間ふ義秀ハアハ呑呑て房錢と
取ふ。セ同幼の病著も大さふ瘡アぬ聖と。ど左コ右ふひをだせども
是六今より起とも四五里ハヤヘ。復丁そ來ゆ。といひうけくもや外面へ立
知れハ廣光も後よ跟々く疼痛を忍びくりそ共ふ板敷ふ尻をうけく。
草鞋を穿た行李を背負ひ坐あくして出立。あくハ門邊ふこすと
送りく後の宿りを契けり。かくて義秀ハ廣光を勦アハ越路を投て赴
く。小廣光ハ入日を。旅宿を出立附ふ。禹步ト運びり。まづふ堪え

瘦もあまへ一町ゆゑて立と。二町ゆゑては息を吻た。と懶り。ふ
夕るまども人目あまが美秀は負ひもえあらび。ひどふ被をも。とかく
ちと小松の郷を去離き一里あまり。まよけまへ日はちや未の下剋ふやぬ。
け處數十町。左右ハ芝生あり松原あり。廣光ハあくみ到く苦痛腸を斷
可あまび一歩も運びて叶へまど松の株よ尻をうけ背を榦ふ推當。眼と
用うる顔の色さそと尼く美秀ハ遽く懷あ。用意の薬をとり出。一
り遍とあく星を勧めて。ふ勸ま。廣光用うる眼は睁ま。朝夷主
朝夷主。ようあれかのづ鸚鵡ふねりく。さそをあかハ焦燥あく。口もちがく
まうりまく。そめかてゆこの痛ひで。露命もあく竭めべ。冠者の先途
あくざくる。是のと死後の恨あまど。歎たくそみ甲斐あく。不もあらぞ。
覓期穴めく。ゆくひ声えよ弱りけり。美秀こゑをばあく。女く死すと

吟。身負水忌むれど。これとぞ食せばして命絶ふ。それも
益。只今負ふ瘻あらず。藥ともか與へる。あづたと肚裏よ
尋思ひ。趨あらゆ。まづらふ水ハあけまじ。田井を索。詰く
吸ひて。まん且くあか俟。といひ腰あら。飴を擧て。廻ふ凡あら山田の
裾。桶の口あんと。むき足。足。信。走。廣光。零時。日暮りて。
流。涙。揮拂ひ。日来ハ猛鬼。壯士が心の如く。技旅を背負んと。す
真成。勦。誠ハ親族。ト。有。死ぬ意。旅ハ伴侶。世。惻隱。彼
諱も。今。そ。あ。れ。あ。た。か。ハ。命。も。さ。ま。不。く。こ。き。故。不。彼。入。そ。不。賣。又
遭。彼。入。を。害。と。う。ん。か。そ。ま。と。い。ひ。信。と。い。ん。や。瘻。父所。を。外。れ
ふ。き。ど。破。傷。風。と。あ。じ。う。ハ。ど。も。か。て。も。生。が。一。縫。霎。時。夜。命。よ。る。
婦。負。よ。で。り。で。う。あ。る。べ。を。只。この。休。不。自。殺。く。彼。人の。為。主。君。の。鳥。よ。

策を送。手。吁。あ。り。と。む。ま。づ。ち。氣。哉。激。」と。も。弱。り。ゆ。肘。と。捲。り。て
身。や。小。腰。あ。る。黒。斗。を。援。出。懷。紙。を。引。伸。一。墨。ハ。染。て。も。首。の。戦。て
筆。の。運。び。之。定。め。あ。た。世。の。キ。ま。た。手。ひ。迷。ま。と。ハ。終。一枚。が。ま。う。ぬ。才。の
あ。れ。現。今。立。限。り。の。命。毛。と。あ。れ。ハ。妻。ゆ。よ。も。俟。ん。忠。矢。家。を。忘。れ
カ。の。何。歎。く。死。愚。痴。な。う。た。小。三。ハ。と。く。ス。な。く。君。住。て。な。た。父。志。を。嗣。よ。す
さ。ひ。さ。か。朝。夷。生。の。旧。男。の。家。よ。才。を。あ。ま。と。み。だ。と。も。か。も。幸。せ。ー。余
か。も。か。主。君。の。こ。何。の。里。よ。と。う。と。と。ゆ。廣。光。が。亡。魂。ハ。影。小。立。才。小。添。て
け。と。ハ。報。ひ。と。名。残。惜。や。と。と。六。ふ。い。か。ぐ。心。か。り。と。ゆ。胸。小。深。め。ハ。裁
教。書。損。紙。引。列。衣。て。筆。を。と。ぞ。め。て。讀。む。一。通。追。捕。嚴。重。あ。ゆ。う。
美。邦。秀。井。平。ホ。ハ。云。云。の。河。原。も。く。共。侶。入。水。と。う。ぬ。某。深。瘻。と

金磨きんまと苦
みく廣光ひろみつ
策さくを送おどす
んとす

ひろ光



負へ主君の寢期を後まく。進退あらふ究々自殺をうなづく。年
月日江三二廣光とちやうの中小続え。この一通を送りかね追捕の
沙汰も是より止んさむ。主君も彼人とも後まくあつとあらん。主
君代憑む彼人これ只末期のすまへ。時や移りをふとそ
そがまく坐を占めいそぐとほまで衰へ。腕小重丸腰刀鞆抜捨く
そ直一斧て松又倚かりて南無延陀仏と唱つ。肚小穴立人とほ
詔ふやま等きよと義秀ハ樹蔭より衝と寄く矢庭小脇と楚と
食和殿重病身小逼き。命を捨て主君を救ひ同盟の力のえよ。
後まくせんと謀り送書ハこの松の背ふ立くこれもや讀ぬ宴小
忠義ハこうことあれども和敵一人死まべとく。自餘の死體を刀底ふゆ
後まくせんと謀り送書ハこの松の背ふ立くこれもや讀ぬ宴小
忠義ハこうことあれども和敵一人死まべとく。自餘の死體を刀底ふゆ
後まくせんと謀り送書ハこの松の背ふ立くこれもや讀ぬ宴小
忠義ハこうことあれども和敵一人死まべとく。自餘の死體を刀底ふゆ

譯のひかみ残せんハ愚あるどもや。且この刀を放めと理り迫て諫れた。
廣光とまよ氣色あく。この期を及び千萬句も回答ハ意盡え。あ
る放く死へたが禁くらむハ情よ似て情ありと怨ばま。義秀ハ彼
あだひかく殺さぬ死をもふ及ばず和敵ハちよ亦汚う。その譯
りんと刀を奪ふ。鞋ふ納めく引摺く走り先づを抗ておひく
とき。招けハ先ふ進み。行客兩人後ふ。一挺の行轎と打ふ。喘ぎ走
く。この行客ハ列人あらず。岩神あつ一二。藁二郎共侶。彼根竹
平ふ。便輿を昇り。あよよ集會り。藁二郎ハひもく。廣光とて
声をかけ。二二主。こゝに使ふ。ゆめます。寝まく。心地ひづか。ふらと
きく。廣光とてかく。これハく。とむづり。か雲安時苦痛を忘れて。ふ
るひみあひ再会の教び氣色ふ頭まく。當下義秀ハ廣光ふ一二を

指し示し江生へ是ぞ識ざべ。こま六尾とく恩人。その名をうそひ豫てゆいが。庄司殿の一三えと告きハ廣光ヤモト。歎び膝折敷くを一三六禁めて處て對面を藁二郎も傷みをう。三二ぬハ僕さんよこの処へまつとを不審。かひひきりん僕へその夜さう。朝夷めの指揮ふ後ひ内室に子自ら。俱ナあくせ。夜を日み繼ぐ。急いふ。幾日もあらず。越中あう山石神の里稻向ぬの宿所よいやれて。一二殿ふ對面。竊ふ縁由を告ぐ。朝夷めの消息をいはまく。隨ふ遼与ふけと六軒と用室よ招入ふ。まよア。内夫婦お迎え。朝夷めの安否家向浅良井殿ふより。父父小三二板を慰ふ。その歎福等閑あらき。友鶴も對面。朝夷殿よ異ひあれよ。死。あらぬふせあらかとく。あらこの母子を奥よ潜せ。僕ふ酒食と賜て草鞋錢さへ牽れう。かくて次の日。僕ハかりき人と思ひ。よその曉が

より胷痛と天ハ明るまでも枕あらき。ちりハ親を刀野ふ報せ復や故主を冤家のる。母娘されうち。朽そく。すく。親苗四郎が茲と親族ふうち任せ。小児を背負。その母脚を扶掖。八十里的長途とえず。此彼の心労ふ。よろこえ。是とく。毎日ふあうト。ひ夫婦。一二ぬの真成ふ人さへ冊く。看病せ。醫西療等閑あらざま。僅よ四日をうまく。胸痛ハもや愈み。と告呈。一二さとバ。又その日より。少殿。の下知とあく。吉見主。後朝夷ホ。その後まぐく四人骨相書をりく。豪。罪科の趙ぬ此。こどもや岩神へも徇らまう。これより。圖宅。畠宿の憂苦をう。ときうびく。とやうんかく。やあぶた。と主人。次ま。畠。及。宿。の僕さん額を合せ。浅良井どぶふ相譚。ども。先づ。ゆめの涙のと性。方も。ちよぬ。達と案じてもよれ。智恵の生。まとど。聊。よす。をゆく。

冠者殿ハ霄の間み井平とうりよ和郎をひく。加賀の小松の佐味坐内を心あてふや出らひえん。まよう外ふ投てゆくやあうと。浅良井ども。下告う伏聞け、現さもあくん。佐味ハ小松ニ在るざき。も。冠者ハこゝ云知らモ。口加北へ赴たゆゆ。あくもととひひく。さかとえハ三三ゆ。此方の三郎共侶。又唯冠者の迹を追く。加賀へ赴くるもとあるべ。がま不。僕ふ往方をも。かくひで來る。四人小松ニ落合て。おもえ向て来まば。う。そ。途めく更ふある。後悔其れよ立ぐ。ひで竊ふ迎と也。と商量既。一決して。まよ。と早ア。う。冠者主後温子とやくん。面影ハ絶え認く。朝夷生ふ逢ぐ。と彼主後よ先遭ハ何をりてよ。とせん。これも又不便の事。ひせま。と躊躇と。元藁二郎も共侶ふゆん。といづまちうづたさう。當下又愚按あり。吉見殿。白色白く。一際目が刀称とぞ。ゆく。これを。後ふ隠す。人目の圍み越さかう。ひかれ。心。まあれ根ぬ莖平。いふね。脣夜を。よし。途とが。けふ。秋の里。山田の裾を過う。と。朝夷と。あが。樋門。あ。水と。う。小端。あ。いぬ。そのえの款。と。今。あは。胸ハ踊る。さて立か。う。を。更。を。祝。と。いふ。が。ひ。笑。べ。死。松原。小懇ひく。を。されや。う。まで。各位。ふ。逢つ。う。と。つまく。彼。死。松原。小懇ひく。を。されや。う。まで。各位。ふ。逢つ。う。と。告。へ。よ。跡。より。お。ゆ。と。ひ。あ。べ。松原。う。く。ま。か。う。朝夷。と。足。勝。き。と。ひ。く。後。れ。く。と。声。低。く。お。る。ま。が。義秀。も。又。傷。よ。り。江。生。よ。あれを。ゆ。す。ま。欽。慕。二郎。小。誠。心。あ。と。ど。も。吉。見。譜。京。の。家。臣。ひ。い。と。稻。向。え。婦。と。二。よ。義。秀。が。縁。者。え。あ。ゆ。猶。冠。者。の。為。よ。ど。を。用。じ。斯。の。よ。和。殿。と。こ。よ。く。友。あ。り。臣。え。日。來。ハ。心。を。竭。く。も。竟。ふ。冠。者。意。遣。ぞ。

ちく。ひけ姫入の助け死る。佛の不可思議。儒の所云天理。疾との
もさのう。りきみ。もし。モナマガウ。復ふ乗積り岩神へ赴たる。療養生をまつ。五只ハ和裁小成たりく。
亦復冠者の往方を索ん。とくと勧まが廣光感嘆慚愧。く。涙を禁め
難。や。わらふ。太息とつれ考みの門より不忠。あく。義士の族。薄情也。
再び必死を脱。皆是和君。見。廣光がこの事ひを半計者。分
かる。せが。今。さう。わを。そらんや。人の情。ふよき。ハとく。主君と迎。れん。お
昇せ。まろ。轎子。小。吾。脩。乘。人。ハ。物。体。あ。とい。なせ。も。果。ど。そ。愚癡也。
和殿が復ふ乗。し。ど。て。冠者。が。ま。へ。來。や。ま。ん。や。そ。く。小。命。を。全。て。復
日。を。か。が。真。の。忠。信。杓子。を。定。規。ゆ。あ。ふ。と。罵。激。く。一。ニ。と。藁。二。郎。示
目。戒。住。ま。ハ。兩。人。齊。一。廣。光。が。夕。戒。食。り。腰。を。抱。た。揚。く。こ。る。す。く
復。輿。小。杠。乗。せ。う。當。下。根。双。莖。平。ハ。息。枝。横。た。う。矣。秀。か。ほ。と

ア。ふ。居。ト。り。く。恭。く。跪。れ。を。更。の。再。会。を。祝。せ。」。ぶ。矣。秀。と。れ。を。勞。ひ。て。廣。光。
入。を。委。総。藁。二。郎。が。耳。を。引。く。云。云。と。密。語。バ。藁。二。郎。ま。う。石。院。根。ゆ。ホ。意
味。が。付。て。復。輿。と。擣。出。さ。う。る。そ。の。身。ハ。後。方。か。引。添。て。舊。來。一。路。へ。赴。ぬ。一。三。ハ
そ。の。ま。う。う。戒。ぬ。そ。が。や。く。殊。苗。ま。ハ。義。秀。こ。と。う。ち。對。ひ。て。松。の。株。の。尻。と。掛。阿
爺。ハ。廣。光。が。氣。色。を。う。る。ど。や。渠。重。病。又。焦。燥。く。腹。を。切。く。ん。と。つ。と。え。吾。脩
折。よ。立。え。り。更。ふ。門。爺。ホ。が。助。け。死。る。遂。ふ。そ。の。死。と。禁。め。る。ひ。う。で。も。女
才。あ。を。す。れ。と。も。寔。よ。重。た。金。瘡。あ。ま。ぶ。只。み。抱。と。憑。む。の。某。ハ。ま。う。より
別。ま。る。矣。那。井。平。ホ。小。環。會。廣。光。夫。婦。が。ま。う。う。戒。休。人。稻。向。夫。婦。友
鶴。ホ。よ。よ。う。う。う。浴。ま。う。と。ひ。う。く。立。ん。と。ま。ハ。一。ニ。聯。く。推。と。め。
そ。の。く。穿。え。ぬ。人。系。吾。脩。が。ま。う。く。あ。ま。う。う。誰。が。為。そ。と。も。り。ひ。ま。
件。の。沙。汰。を。サ。ー。う。稻。向。敵。の。お。ち。り。内。室。の。周。章。悲。歎。友。鶴。ま。う。平。ホ。

あそどとりひく腹ふれ爲當て。あら日か一目かうよ。間か遠か是首の
隅彼丸の隅小位だう。そまを亂ふ病む二親を。又すも鬱悒胸うすみりで
和歎ふ環會。ゆくかく人とゆべがこそ。兎毛可の心あて成。よしと昼夜長途
走て。あんくちで逢あう。放く何知へ遣る。べれかのふが虚言欺實を坎ハ
こきをかく。妻子の歎をろひ汲み。且山石神(かくち)遷りまじと繰かぐ。虚
懷を搔掻アロく友鶴が書封をとす。生きて。死みて。逃せ。矣秀封皮を歛被た。讀
果く幾條み。」裂く袂小袂納め。女子ハトテハ。よあく。心狹たれあれど。
かくもあく。かくも。勇士の妻よ。仙けあ死所。假寐の別と惜。空屋
驚か。厭鬼く夫を膝引著くとも。天の化せる禍が。福と形えをや。内爺よ
かくも。これ友鶴成娶。前か彼友達のゆき。りく。幸ある妻子の
顔をかく。危窮の友を憐れ。初より友垣を。結ハぬかくとも。さへあく

も。と義小勇む誠を感じく。一二入りアリ。もありう。且く。弄する。
松並を捨て。くみうち拂ひ。あくよとも。彼友達の在処を。知く。ゆふ。あくね。
りうつき
一个月があづを。次二年三年ゆく。逢う。充次。あふと。逢う。とふ。不定。ゆく。
下。び岩神へ。還。ア。更。小旅。あく。今。す。て。遼。な。あ。ま。路。次。面。曝。ぐ。う。
隠。き。く。時。を。待。ア。そ。よ。され。お。対。寔。小。脅。カ。あ。い。も。旅。よ。あ。く。ハ。い。と。危。一。柱。
愚案。よ。隨。ひ。う。と。復。諫。ま。ぶ。莞。介。と。笑。ま。う。ま。の。お。む。を。き。ま。幾。千。騎。よ
く。ま。
聞。き。と。ゆ。之。入。境。を。ゆ。よ。り。易。う。倘。運。竭。あ。小。敵。も。大。刀。折。く。生。物。き。え。
かく。謙。倉。小。牽。る。と。も。これ。ち。づ。處。分。あり。命。ふ。恙。あ。べ。彼。友。達。残。家。め。
ね
二。年。み。り。く。内。遭。ま。ぐ。二。歲。が。経。み。る。岩。神。へ。遷。う。ん。こ。き。う。の。す。と。稻。向。え。を。又。移。よ
は。く。く。あ。ゆ。く。阿。爺。ふ。あ。ひ。ゆ。き。心。か。す。み。あ。け。ま。じ。ど。只。い。と。惜。れ。去。歲。の
そ。月。浅。良。井。よ。領。う。母。の。像。見。の。舊。衣。そ。の。夜。さ。り。彼。女。房。い。と。瞬。り。ふ。され。ば。

取忘れうち小疑こころ。とひバニうち微笑わらひ。そへ五口脩も認ゆる。母めが手織の單
衣被きぬ。たゞあえどもん。そきあれば、今をほあり。和主わぬが身みもかえせし。
とりづく領け、衣あえびこそこのそもの背腰よのりも著て。吉見の宿所しゆじょを出でひれど。
浅良井あらわいどぶとぶ物もの。友鶴ともづるとひふ處ところをき。五口脩も其妙そのう居ゐありて。和主わぬ
考心かうじん彼婦かれふ人の篤實律義だくじつりつぎと我折くず。今あほあうと説示せしせ。義秀よしひで嗟あひ
頭あたを拊あたたか。忙いそそ折くず。あくろ衣いぬもよぐある。二あ死宝あしほといひ。一伏。
うち心こころまのせど、推おねあく。友鶴ともづるは庭にわとされ。流石りゅうせきハ底そこの妻めけり。
人ひとこづるこづくる信しんあり。こき亦信しんあくさんや。友鶴ともづるはこゑゆす愧くわいて。こづく人ひとを打歎うたげ
くへき。只ただ彼衣かれを寢ねの母めも。義秀よしひでともかく慰なぐさめよ。と夕ゆふもくくも傳つたて。庵あん
今宵いまよハかる。宿やどアラフあらふく。な不相譚ふぞうだんとあり。ども又義秀よしひでが面おもてを反かひ。二
二ふた旦たんひひつとく。慚くわいて異ことうござござ也やせん。欽きんごふとく。墓はか二郎にろうめ。この

松原まつばらのあよごゆく。和殿わどを等そなと密語ひそかに。渠わホホを先さへ遣おとへ。今ハまぞ祐ゆ
ヨよびよん。日影ひかげも既そなに傾かたむかぬ。疾めまい去はり。とひそく。立たまく。二ふた志しがく。嗟あ
歎あう。壯だうふ卷まきう行囊裏ゆうとう。一包いつぱうの金かなとう。とまく緊要きんようの料りょうふとく。稻いな
向むかの處ところ与よされ。切きくこ至いたる。受うけ納なく。路費ろひせし。本望ほんぼうあうん。
九こ人の子こ簡かんハ勇士いしゆのまくろと表裏ひょうりゆ。と表裏ひょうりゆ。とあれば。立たまく。
そりく怒のき。叱のらくと山石神さんせきじんへ併あわん。とふりうね。やうそくやこひ。納なめ。人ひと
と真成まなぶふ勸すすめ。義秀よしひで取とう。戴た。この高金たかかなハ分わけ過くう。され。舅おじの
好意こひ。これえよ推辭すいし。路費ろひめび。と懷中かいちゆうへ楚よしと納なめて。方かたを起おきせ。六
三さんゆゆ亦身みを起おき。和主わぬハ何なん因いんを心こころあて。ふ。彼人かれ達たを索さめ。あ。奇き。く。も
友鶴ともづる。一筆いっしもアアと。返かまど。とりふまく。送おふ西にしをコこへ。彼井平ひいへい
舊里きうりハ近江おうみの义ぎ賀かとやがる。又信濃しなのゆ。氏族しづくあべ。さよぶ。以い冠かん

者ふ勧く。由あら里ふ畠アマム。且江信二國を常く遭ざる亦復便宜小任せん。その先をハ定めに。又友鶴へ返書のるハ不慮の證据と云ふ。あり。或ハ途ふとう送一。或ハ賊ふ掠らむとあとへ。もとよりハロづ。阿爺よりひみれ。傍くもくべくも。もともと忠人の怀抱をテそ憑かれ。そハ空うま。あつろぬう。透えとく五六町。共侶ふゆ夕日影樹間を徧ら掩どろ。名残ハ堺ぬ林原。さくばうちゆく別きんとく。峯秀歩を駐むま。一ニハ町喧ふ再會を契ア。途横ぎてゆく入を木からまで目送。作者云先板第二編卷の四の二丁の左より。二丁の右ふ至て。峯秀ハ浅良井小ニニ小藁二郎を冊けく。越中婦負の岩神。か。稻向が宿所へとく。落一遣せし。代廣光ふ告る。終小藁二郎。を恨く。引太郎とちうつはう。彼引太郎とりふ者ハ第二編の端像少ア見えて。小藁

二郎。後弟えこハ心野の松原ゆく。その伯父苗四郎と共に。時夏小物。きりぬを。が。但えとく誰やあづ。僧者の公づめふあづ移ど。列成く。後元出せ。正一神ふ暇あく。そがまく。小糸行せり。因て。あく。よど。の。鄙語。ふり。證文の。出一後まく。との。あく。人。缺

中輯第廿四

山寺乃古塔婆
駒形の老嫗婦

吉見尉者義邦ハ。その夜。勝澤の松原ゆく。後陣ふ敵を禦んとく。井平と立別。西を望く。走ア。ゆけ。おとく。仇め。遭ふ。か。序伏兵のやん。うとく。足場を掲り。樹立を指す。半晌許立在む。経小曉。く。近れ天の。色。修忽。結陰。風と。日。風のや。驟雨盆を復がねく。樹。蔭。わなまく。身。口濡。濡て。う。あ。お。ど。井平ハ。今

あは讐を挂る。歎歎ひせどや。と想像する。心も天のみ野千玉の暗れがえり
降そぐ。而も樹蔭を出難う。かくてやると祐祐。而も歎雲ハちさかり。星
の光りも明るよ。近う。今やでも井平が。敵の囲み残りで本山へ参れ。う
け。不便あり。かとせが共侶。大刀の刃の續くや。只切死ふ。死へ死なれど。
今ハトモ時移す。立て傍とも甲斐文。井平既小かのじ。廣光も
今ハトモ領主の討兵を挂く。搦らき。歎歎ひ。歎二。一小一ツハ違ふべくも。
懃る。それのみ存命て。誰と。死ふ。艱苦を凌ん死。死。時ふ死され。死す
ゆ。やを恥辱す。腹を切る。と。主ある。刀の鞘。又。挂く。り。これ
あ。短慮。死。易く。生。難。三。二。井平ハ。搦らき。とも。脱き。とも
定。あ。ぬ。早。死。亡後。彼。恨ら。り。やせん。その存亡。を
より。あくとも。既。断金の交。す。朝夷。生。今。あ。現。小。加。北。小。あ。る。か。

この人を訪て。そと。と。かく。も。と。ぐれ。と。胸。小。向。ひ。胸。小。答。と。被。も。う。衣。と。か
よ。を。絞。り。脅。が。便。の。捨。笠。取。り。と。と。戴。る。北。圓。と。投。て。赴。れ。け。し
は。く。と。哀。れ。あ。る。さ。る。宿。小。義。邦。ハ。ゆ。く。と。い。ま。ご。幾。里。も。あ。で。天。ハ。明。入。の
往。還。え。鬱。悒。ひ。バ。又。さ。ふ。再。度。の。追。兵。心。う。と。あ。し。同。道。よ。う。進。入
と。く。路。あ。た。途。不。可。り。へ。る。熟。ぬ。草。鞋。と。破。き。く。サ。刑。棘。と。俟。で。足。ふ
血。を。深。め。長。毛。裳。裙。ハ。裹。て。も。拂。ひ。ぬ。草。鞋。と。露。け。ー。或。と。と。六。堪。く。う
野。水。ふ。臨。く。こ。が。面。影。の。寢。小。驚。鷺。た。或。と。と。ハ。嵯。峨。青。巖。小。吻。て。樵
夫。牧。童。よ。余。底。向。ひ。朝。ハ。林。鳥。と。共。小。生。き。ど。の。夕。の。棲。宿。小。憩。ひ。吹。ハ
郷。黨。の。上。ふ。在。り。今。ハ。萬。里。の。客。い。う。日。よ。歩。く。夜。ふ。宿。ア。か。く。く。か。ロ。ク
賀。圓。小。松。の。郷。よ。あ。く。訪。ベ。佐。味。坐。内。ハ。蹴。躑。を。り。て。新。將。軍。卿。家。小
め。す。と。こ。ぞ。ち。ち。ま。く。あ。召。使。き。去。歳。の。春。簾。倉。へ。あ。り。と。ゆ。の。え。ー。ふ。義。邦。ハ。僧。舟。乃。行。宿。又

穢を失ふべく。進退其處か極り。入りふとも見ゆべや。望内かくの如く
あふ。そよ吹風の便り。その凡事。小告。去歳の月。朝夷生と
絶ぬ。やうて悔一け。彼入らへ。尋事く。さう。吾脩を恨み。この春
す。も消息のゆえ。しほこの故。あらん。おふ何と。おふ。何と。おふ。ひ苦
立在り。さてあづな。あづな。且客店。その夜。次の一ト日ハ
逗留。ひきうちづく。思惟。井平。井平。廣元。けり。追ひ。著。ま
或ハ。後。或ハ。又。櫛。捕。ま。小疑。ひ。ふ。おの小松。商賈。多く。いと熱鬧。に
里。あれ。おぞろ。知音のあ。ま。と。世。成。漬。が。死。死。あ。ま。ど。裏。お。義。秀
ト。結庵。ま。陸奥。へ。と。去。ん。と。や。う。を。これ。懃。よ。絶。ぬ。と。佐味。を。憑。そ
遣。一。う。お。あ。お。坐。内。お。ま。ま。が。義。秀。ハ。あ。と。り。と。又。更。小。陸奥。へ。赴。と。う
め。あ。う。べ。恨。く。ハ。投。て。や。里。の。名。お。ま。ま。れ。ハ。こ。き。又。跡。を。慕。ま。ま。被。む。

あ。う。と。も。縁盡。だ。五。四。郡。の。い。と。廣。を。も。か。ふ。ド。廻。を。う。ん。や。環。會。う
と。や。あ。う。さ。と。で。も。陸。奥。ハ。大。圓。え。經。仕。が。乱。あ。り。と。の。と。も。世。成。漬。ふ。と。
便。宜。あ。う。ん。安。直。お。彼。地。へ。赴。く。べ。と。や。う。や。不。名。ひ。決。つ。あ。う。と。振。た。て。奥
や。道。の。程。を。向。あ。と。う。お。客。店。の。あ。う。が。り。う。や。あ。う。お。奥。羽。へ。越。た。う。や。
い。も。送。け。れ。旅。あ。る。そ。の。途。究。め。難。れ。ま。う。り。水。行。を。嫌。ひ。ま。う。ぎ。ハ
當。岡。川。尻。湊。お。ハ。奥。へ。渡。る。便。船。ヨ。ヌ。か。ま。あ。う。よ。と。件。の。港。口。あ。う。六。里。有
餘。も。ゆ。ん。い。と。年。弱。を。方。ざ。る。の。独。行。よ。と。ほ。び。か。和。ト。く。と。水。行。よ。
赴。た。え。と。勧。め。え。し。知。つ。く。うち。笠。く。む。文。治。の。ち。じ。ら。と。の。叔。父。
九。郎。判。官。か。と。く。富。権。の。國。代。越。て。陸。奥。へ。赴。た。ま。ひ。と。の。途。の。艱。難。
夏。の。蹟。八。人の。口。碑。小。傍。く。せ。り。そ。と。ハ。主。役。七。人。と。只。為。せ。ら。あ。る。よ。
水。行。あ。う。と。叶。い。と。そ。と。ハ。途。代。石。上。ゆ。う。支。の。蹟。あ。る。よ。こ。が。憂。す。か。と。

まく。公の事も心外やせども、さうぬ容ゆひてやら。詰旦旅宿を出で川尻の
家とおも。びんせんりも。港口へ赴き便船を求ふ。すゝへ越後の新潟出羽の象潟へ交易船の往還
あると月とうり絶えとが。この日も奥の高船帰帆の纏を解くあまぐ。
長邦是ふ便船。大洋ふはく。さまで朝夷秀が。かく廣光と
技抜た小松の郷へ來つゝ日と。長邦の衆船と同日ゆく。朝と夕の差あまぐ。
竟ふ送る是をあまぐ。只是時運といひあまぐ。一日の遅速ふよりて。その
往方どもあまぐ。おほほん。ほん。はん。あまぐ。のあん。かく件の高船が。それ日
纏を解く。ども次の日より順風四半ゆく。此の港口。彼処の泊と船歇
アマ日を送り。四月未及く著岸せし。ちるもこの船象潟へハ著まく。陸
つるふけやみこり。とさん。うと。久。数日。熟ぬ水行。搖船
奥圓氣仙郡尾崎の浦か還る。長邦はおの數日。熟ぬ水行。搖船
きて。浦の名古屋又著みけまく。更ふ活まく心地。そぶき其処小旅宿と

求め且く疲労を治めまく。さてゆく里ハ定め。磐石井郡高館へ道の
程遠く。もあまく。故彼処又。叔父判官の墳墓ありと人ひて。功名茂畠と
及ばず。かづぬりハ冤枉。不幸薄命相傳。叔父の神灵あは在まく。
同憂を憐さん。やまと。戦死の趾を訪ひ。墳墓の苔を拂んとく。尾
崎の宿アモ。おれども。素より急ぐ旅あまく。二宿ゆく。高館の古戰
場を歴覽。一水を傍。山路ふへく。玉造郡。ア。義経の墓。弁謁。雲
立々々。騎形山の麓を過ぎ。今朝を亡く。四月の日影も下呻みあまく。
け。このれ。山ところめく。住む人稀あり。やまと。客店へあまぐ。もあまぐ。
これ。右ふある茂林の中。一座の梵刹ありて。大门ハ路傍ふ建て。仰
なく扁額を瞻る。月寺の二字を題せし。柱礎斜よ。門扇傾て



と。尋常の造り。みわく。秀衡が世ぞ。由緒ある道場
あり。と推量ら。日ハ暮んと。道遠う。ちく宿アミを乞ふ。と肚
裏ふ。尋思。角門下り。進み入ま。地肉ハ廣く。本堂険く。茅葺
あく。堂の傍ふ。玄園めだらぬ。外あり。庫裏と。おが。死ぬ。昔の名残ハ
夏草の間。ひそむ。礎の墓所の外。亦一物。美邦ハ玄園の不とう
近く進みて。西二声。呼門ども。誰と應ひゆ。法師ハ背門
きよ。堂を左へ遡ア入ふ。趺上りゆ。卵塔まくり。畳く。土
饅頭離く。草ふ。包まく。拂ひ。苔よ花ぞ。用く。身のあう果ハ誰も
み。これえ。と觀ど。外の哀き。も身ふへく。墓石ふ。懸す。あ死
人の名代。一ツ二ツ。繞む。宿ふ。劍淨士。男力と。写せ。右辺ふ。建久四年八月
云々。とある。又推あぐ。貞性女人と。写。左辺。又。建久五年四月

十一日とあり。傷ふゆり。る。寧都婆。あり。録せ。梵文ハ。體。冥滅。う。そ
ど。梓氏治部。悉。七回忌追福。拔苦。樂の為め。正治元年八月。施
主敬白。と大書せ。二十六个字ハ鮮よ。見え。かづ。度後。もく。羽蛾
駿。寧都婆の朽理。よ。跋。纏。ア。義邦ハ。これを。見。あろの中。み。あく
訝。梓治部。悉。有友ハ先人の。差臣。あり。嘗初橋太左衛門尉。高保
ホと。共。濱の宿の館。を成。討。武士。刀野。僕杖。照時。を防戦。ひ
尸。を。一朝。の兵火。ふ。焼。名。を。十年。の今。ふ。首。忠義ハ。侵。て。これ。も
ゆ。あ。多よ。ひ。み。も。あく。この陸奥の果。み。渠。が。ある。追善の塔
を。建。へ。誰。あ。と。え。そ。の。親類。歎。恩顧の者。歎。と。昔。の。人の。恋。と
向。す。ゆ。あ。れ。墳塋。惆悵。と。立。在。而。信。外。せ。五六。歳。あ。と。お。ば
あ。と。え。男。子。榜。の。夾衣。の。裙短。あ。と。被。腰。又。一。口。の。短刀。を。帶。み。み。

二本の仰花ふ阿伽桶を食ふと。件の墓の邊ふある。美邦を冠す。
又見えり。その墓ふ木成次だ花成も向て跪死合掌す。念果く身を
起し。又それを冠す。美邦も亦不審立ゆる。此の男子を元
まばあほらひうてや。進みよろて小腰を折め。卒余ゆべども。かへ方を
蒲殿のあん子えと。ゆうえ。吉見冠者ふ在を。と向きて。美邦胸
手鑿げど。隠して。あらまへと。ひうえと。莞余と笑み。これハ則美邦
あり。抑和殿ハ何人ぞ。と向々され。忙しく。身を轉じ。額をつね。陪臣
の子で。バサヤ及バセアヘト。某ハ梓治部丞有友が家隸馬糸
標太。一子小同苗標吉郎と。なれ。故主で。治部丞ハ去ぬ。建久
四年の秋。賓の宿の館。討兵を柱て陣歿せ。親ゆて。馬養標
太。乱軍の中。ふ難免。そのと。某十五歳又の教訓已て。はゆ。母ふ

俱く後門より逃れ。この駒形の麓の郷士田丸郡内が女房ハ母が妹。ぐい
ハ。転て陸奥ふ落。親子田丸ふ身を寓。年來。未經。ゆき。あ
る。母ハその次の年。持病の血積。よろ。詰。もろ。あ。な。ハ。この月
。今日。亡日。あり。このと。某廿歳。ふ足。も。うち。続。た。親喪。ひ。
叔母。叔母支。を。よ。あ。渡世。の。と。相禪。ふ。郡内。ふ。子。あ。と。則。叔母
の養子。かせ。ま。あ。この地。ふ。駐。ま。え。え。駒形の一村ハ泰衡。因。悔。滅
亡の後。漸く。凋蔽。今ハ家數四五軒。ふ。過。ぞ。これ。よ。養父。が。所。徳。も。
と。く。か。え。そ。つ。く。め。よ。客。を。う。り。今。で。ふ。養母。と。某。の。所。帶。の。山。の。木。を。伐。出。一。或。ハ。獸。を。捕。よ。て。
生。活。う。く。り。あ。さて。これ。や。て。鳴。呼。が。す。く。こ。ぐ。入。戒。宣。示。ま。と。と。お。疑。ひ。を
釋。ん。が。あ。か。く。近。属。世。の。風。聞。ふ。蒲。殿。の。あ。ん。子。白。鳩。丸。ハ。下。野。國。足。利。ふ。

入る。吉見の冠者義邦と名告せりかとりふあるあれども、邊境にけりば。
ちろや。やひら乃方ひをまど。さあ成今又ふよ。ありく彼君。やあくど
や。とゞかむうの試み。平介は物ひひうけと憚り。氣きあく。言下み名
の告げある。是併古主梓殿。及亡父母の道する歎き。實母の称月を記
し。生活ふ暇あらず。平日より。逐く詣ど。不慮の見事え入る。かん
じ。生歎く。かく。やうとふあん。義邦頻ふ感嘆。機の伐株小屋を
ひ。原来ハ汝ハ梓が老黨。標太とせんが子あり。欵こと邊境ふ呻吟
ハ舊縁の人と邂逅。大さあとどちうづをう。そも又汝ハりゆく。
これを矣邪と知らず。と向れく。標吉声を低め。君をろ一召れむや。
追捕の沙汰嚴密。奥六郡りばざる。住む人稀。山里ちぐ。
經任一味の反逆人吉見冠者義邦。そ等類某甲某乙と四人乃姓

名を識く。骨相書。某も又。君が面影彼骨相書ふ。似まき
まの。さあ。治部丞がゆよ建す。寧都波安ふさつ。あづぎ。て去う
たまへ為体。訝く。舊恩舊怨の竭ざ。所欵他入。又
如。此足。危たる。ふり。と真成。密語ハ義邦せり。警戒
原来奥の盡れ。と。ひ。隠。と。あ。と。現。この磐石井の一郡も。經
任が肩籠る。平泉の柵。ふ遠。と。こ。と。一点。も。逆意。や。築。を修羅五
郎經任が。一味。与黨。と。せ。と。と。み。あ。是謗者の誣罔。あれど。一朝
更。說。盡。か。と。没。故主の恩義を忘。と。有。友。が。あ。ふ。七。圓。の。道。庵。を
も。と。の。志。極。と。よ。と。と。と。ひ。叔父判官の墓。ふ。指。く。この。丸。ふ。幕。く
日。ハ。頃。え。ぬ。宿。を。こ。ん。と。寺。内。ふ。入。く。峰。門。ど。も。応。せ。ど。法師。ハ。背。門。ふ。と。ん
と。と。ひ。と。墓。所。を。遇。ら。ん。と。と。と。この。寺。伽藍の名残。あ。ぐ。と。や。そ。か。く。や。そ。

頬さうぞと向むく標吉。さん。鎮守府將軍秀衡めの時まづ。祈願
所でひ。泰衡因衡亡びて。坊料を失まく。今ハ同六伯二人の住
持ハ券縁のるこの春より。國府よかく寺ふをとど某が養父郡
内が菩提所す。實母をも。は死し。塋みたこの墓石ハ某が二親の墳塋
を。又右あつて參詣入る。今よりハ四個年前。正治元年八月ハ實父
標太が七回忌。當日。故主治部悉の陣歿も同年月ある。日をれど。
標石を立。婆を立。經を誦せり。ひれ。さて。長物。ごとふ。日ハ
没果。旅宿を。何の里。定め。りひ。をち。孫。お。其が處。あら。ハ
山を。うち。ふく。孤屋。あり。かつ。より。十町。よ。過ゆ。を。進む。を。あゆ。も
あき。ど。潛び。りく。穴九竇の地。そ。綺。り。郷導。つ。や。ろ。ん。と。ら。ふ。義邦。ゆ。そ
感。謝。ふ。堪。ど。とき。孤鷹の侶。を失ひ。か。と。蝸牛の宿。を。ゆ。定め。ど。不

憶。も。義士。か。あ。く。舍藏。ん。と。り。く。ふ。り。そ。う。他。を。永。ん。や。但。そ。の。養母。の。う。け
引。く。べ。だ。や。ひ。か。わ。を。そ。く。ざ。う。の。み。否。口。そ。の。う。み。内。あ。う。安。う。養母。と。り。ど
実。ハ。叔母。の。妹。で。り。ハ。鎌倉。ハ。故郷。あ。る。これ。よ。包。果。べ。く。も。あ。う
裕。ど。強。顔。あ。ん。歎。待。ハ。仕。べ。ま。ど。そ。の。性。淳。薄。み。似。重。ど。も。年。本。惡。意
あ。ふ。父。ふ。き。ハ。後。女。を。く。思。口。き。よ。華。ひ。途。よ。日。ハ。暮。あ。ん。土。き。せ。り。と
勧。是。ふ。義。邦。あ。く。歎。び。く。角。門。よ。う。走。ア。出。標。吉。よ。導。れ。駒。形。村。へ。卦。き
け。果。く。途。よ。日。ハ。暮。う。れ。ハ。標。吉。ハ。憚。ア。の。圓。も。あ。く。て。義。邦。と。宿
所。よ。伴。ひ。養。母。黒。萩。ふ。古。え。の。趣。を。告。ふ。き。ひ。義。邦。ハ。そ。の。心。戒。取。ん。あ。よ
腰。ふ。纏。ふ。沙。金。四。十。兩。と。ア。と。出。し。五。口。脩。あ。く。在。く。ん。や。今。文。ふ。不。用。乃
物。え。且。く。闇。ア。と。ア。れ。と。く。惜。氣。あ。く。歸。と。ま。入。ハ。黒。萩。ハ。そ。の。入。を。附。する。小
あ。ま。後。ど。も。こ。の。金。を。入。く。些。も。換。錢。せ。ど。遠。ま。ど。ひ。く。飯。を。炊。た。義。邦。よ

勧めり。口りもまでもつぶ宿み潜せり。と化るもあん歎待も、みふ似て
けり。さてその夜さり矣知ハ刀野時夏み濡衣を被せられ。宍屈よ身どがれ
みて足利を走アリ。廣光井平義秀がうさんみかちもあく告め入バ標
吉頻め驚嘆。養母黒萩共侶。小時夏を惡ミ憤ア。又廣光ホ二人が
往方りふと想像アヤシ。緣由をゆべト。矣知の薄命をじるく痛ア
くそ思ひけり。ウタ親子が誠心よ。矣知ハ稍あらむちゆく吉見を逐電
あらる夜より。僕まで四十餘日。今宵ちづめく枕をすとく。痕小就り。あ
ベ。却後標吉ハ聊思慮あるかのあけび。訪入人稀。山里あらと。
一石も油割せど。その次の日より。矣知を奥さへ潜せり。その房ハさくぬ
容よ。山静ふ忘ることあ。さう泊ふ夏ハ過だ。山里小衣う。秋の夜長死
らる。と云。ひとえに。比めあり。さまで鄙語ふ人の裏語。七十五日。と定めうちも所以あ。矣

知追捕の風声も遠不空えどあくつけ。標吉ハ黒萩と商量。吉見殿の
いとこ。窮屈ふとえちふ。今ハ人目をあひ。也要る。渠ハ誰と人同ひ。
鎌倉よ送へ。標吉が才えとも。後才えとも。暗めん。今ハ怪む事ゆ。ド
とく矣知ふ由を告ぐ。あらくふ憚ら。假使ふ名を喰う。黒萩。叔
母の。標吉ハ兄の如く。あつひざるを改。ハ矣知も亦あ。ト親子ふ人目
ば。ハ使れ。抑件の黒萩ハ原ハ和歌鶴と呼び。大磯の遊行女
あ。その所ハ武士の妻あ。ふ。あらく妹ハ河竹の流れよ立。と尋ね。ふ。
黒萩八年十六のとぞ密夫ふ誘引。果ハ少女ふ售遣ら。支ハ往方
あ。と。あらぬ。黒萩が二親ハ。これより先ふ世を。う。と。所。ハ。往方
ト。あらぬ。と。年來安否を。問。せ。め。せ。と。尋。ね。め。大磯の遊行女
郷士田た。郡内。有一年鎌倉ふ出府。と。逗留の間。この和歌鶴ふ。あく馴

達く別たゞふ忍しのばる。苦思の年期も今既よ絶きふありぬとせうて身價みけ也廉あれば竟まことに和歌鶴かづなを購出く。故鄉ふるさとへ伴ともひよ及およびく。そが竹たけありと
やううぶ郡肉ぐんにくハ又また和歌鶴かづながゆふ人ひとをりく。その吹ふきと妓ぎ支し小勸解ごくげんさせ
うり馬うま養いく支婦しょハ黒くろ萩はぎ。鄉士きょうしきの妻めよあるとやうて心こころの中なかうく致むかて
勘當かんだうを許ゆ。田た郡内ぐんない共侶きょうりふ召めしよせく對面たいめん。黒くろ萩はぎ衣裳調度いじょうとうと
造つくり立たて支婦しょ小餕ちやく別たゞえ遣おとせ。和歌鶴かづなハ妓ぎ支し小辭ごくじノヨヌれ
郡内ぐんない小後こご。駒形村こまがたむら赴たど。乳名にゅうめい黒くろ萩はぎよりかゝつて。九餘年くじゅねんの星
霜さを送お。去歲こくさいの秋良人あきらうじんは後ご。嬪ひめ婦めもあよされども。甥せを養いく子こ
あくまき。ようづよひく。もめく。墨裏すみいろ姫ひめ支馬し養いく標ひ太だ津つ殿でん。
妹わいとその子こともくと。謙倉けんそうより來き。黒くろ萩はぎハコく姫ひめかぐら。その恩おん美み
いと高たかけまぶさくろく歎たん。あくよ己おのを慎まこと。郡内ぐんないも亦信あつゆめ

けよぶ妻めの姫ひめをあく。後ごの標吉ひやくを養いく予よせ。標吉ひやくも亦老實じろうじたつて
壯さう俊じんをを。養いく父ちち母めの孝こうあり。かまぶ一家和合わがい。里人うじんふ參さんされ。うり
そが中なか小こ黒くろ萩はぎ。一いつの瑕きずあり。何なん竹たけのむむ。今いまもあや酒さけ嗜す。醉ゑ
をを。男子おとこは狎なづ易やすく。みづかられる。まづ嬪ひめ婦めよりての後ご。皺しわめあ
額かほ小こ紅粉べにを施ほど。鎌倉様かまくらさま結髮くわい。五十いそ近ちか老女おとなめ。彼かれ寺てらの住
の秋あき。良人らうじん。郡内ぐんない。世代せいだい歟や。毎日まいにち。指月寺さしづきでら。墓はかあり。而は彼かれ寺てらの住
持塞ぢせ玄げん。親おやく。や成なり。初はじ。早晚じまん。密通ひつう。人の嘲あざをうり。今いま茲この
塞さ玄げん國府こくふ。多く。久ひく。寺てら。在ます。まづ。夫欲めう。折ちり。若わか知し。脇わき廻まわ。女め
子こ。あく。す。や。男おとこ。態たい。かくち。惑まよ。人ひと。あく。曾なま。焦あせ。せ。ど。む。こ。る。齡年齢。
多お。多お。孫まご。の。き。弱よ冠くわい。も。の。氣韻きいん。高たかく。威いき。言い。苟うそ。其その。も。ひ
う。づ。を。よ。も。あ。宝たからの山さんへ。あ。ざ。る。底そこ。空うつ。心こころ。地ぢ。五ご六ろく。八は月つき。

送り。居あひよふ愛まきのへやあて堪らまど既又夜寒よす。
え標吉ハ毎夜又獸を獵んとく。曉こよそばうり来ぎ。黒萩ハ折しをよけれ。
目間小袖をひそめて。情郎ハ見えども。あ能い。と高たまき北背のこゑ立
たる。袂を掖なむ。抵觸れく。あまねうぞえりけつ。矣。邦ハ黒萩う為
体小呆果。腹たゞく。あまじども。乳えよへ頭さむ。いと暗うみ切らして。
とまうで。どうせ。黒萩ハあほあり。とまうがまうぢふす。この人既に十
八年色情あれ。あまざれど。そのるぶりと鉢。苗小所。云晚稻あづべ。
あまの人の酒あひ。う情を惹とあんと。竊は準備。今宵ゆう子
標吉ハ弓箭を携てかゝ。黒萩ハ酒を温。肴をめぐ。矣。邦のほこうふ
按排。山窮不際限も。世を潜せゆ。あん乳も營。われあまべ。
一度過ぐ。拂寝。用意。けふ人の底意ハ志。推辞。矣。

よりのあひき。矣。邦ハ勧ら。盃を返く。受飲盡く。措きへ。黒萩ハ残。黒
額の皺。うちよせ。其元然と。う笑。そのあん盃。らふえ。といふうと。や
う揚。うち戴。た。獨酌。兩盞。かまひ。矣。邦へ進。まじ。半盞。も受。ど
うを。困。ド果て。どく。け。黒萩ハ只酒の勢ひ。を借らん。と。り。矣。邦。うさの
浮ひ。ど。受。こ。喫。宿。顔の黒。死。よ。紅色。と。帶。く。柿。紅葉の如。光。澤。あ
蟀。各。よ。張。り。助。り。も。目。を。糸。う。こ。矣。邦。を。折。こ。又。う。り。や。う。さ。嘔。吐。も。う
づ。心持。ハ。ま。き。ど。矣。邦。ハ。これ。を。も。忍。び。今。宵。ハ。小。恙。あ。う。許。一。良。と。身。と
起。く。臥房。み。へ。る。を。黒萩。ハ。わ。あ。あ。が。目。送。り。く。盃。盤。と。う。と。納。め。躊躇。む。か。が。
行燈。を。引。提。く。も。の。が。臥房。入。り。ぬ。且。く。黒萩。が。頗。小。憐。を。苦。む。声。を。矣。
邦枕。と。歌。て。あ。の。老。女。ハ。酒。發。過。て。吐。を。反。く。ゆ。あ。う。欲。さ。う。い。食。傷。
せ。う。あ。べ。憎。と。も。り。へ。ど。うち。措。き。と。舡。て。臥房。を。起。く。納。戸。の。誠。門。と



推ひきを苦痛の声のやめらればかくとあくま成ざるうど。心地ハ何と
いと向まく黒萩吉たえぐふうち臥せようと名をどふ寝が並度す。憲
び。願うべこの鳩尾を押へまくとどひあくど頬よ喘たゞく已ざれハモ
が。邪辞さるふよ。もあくほきよひゆくそみ脣脢へ當ひ代推當く。苦
痛ハさうよな软と向れく黒萩傭しが。あり猶廻み下ふぬ。あらびど
欽。あらもやかやあふゆりとくに食きて抱をよせんと。しづが義邦
怒え堪ぞ。卷衣引く黒萩が頤礪とわゆがやせ。恥をあらざる老女
あ。義邦とひあるのとひとろく調戯。狂人の酒波うべ。
り向後と慎む標吉ふ信と生口と年も愧よと罵く。席を蹴立て
おまハ黒萩ハ消ぬぞうふ打坐く。要時タモリうよど起え。うち
ふ。りゆそちかひだら。傍そく西のみ頤抱する。その苦痛半晌ぞう。やくもこれみえうら。指を

。歎を拊ふ順日搖動一糸切歯板歯も一枚脱き。ああ悲しや。と
吐出。嘗て受載く惜めどもその甲斐。腹。あか胃ハ只浅間獄と
きども富士の煙の靡み入ふ。今とく怨ハ復されど落魄人を扶持とひ。損
ありと得か。と昔ゆ今もりふあふ況や反逆野心の後木を伐ア。草を刈
拂ひて索らと罪人を含藏。この廣イ世鬼ふ二人とよもあうじ。その大
恩をうひ。夙暖やう隨ふ高慢。親みをもぐた女ふを紙抗打ふ
て。あんふかう恩をも入で。情一郎。竟アハシキせんりをと泣つ懲
あがね。よもがく。つがや。潛音ふ通宵むう咲たう。是より先よ義邦ハ卧房又まいり。アアても。そが
と短慮とりへもあやうら。ト。や彼老陰婦を礼う。所れとしまべて。
え隠さ何うあうん婦人の性ハ僻て妬めり。そぶぬすむ懲をとも。いろ

ひき やまと。ひつまへ ひま。ひま。ひま。
ぢる非矣を改じた骨髓ふ織ちやうぐ。これを怒ばひハせん。さればとくこの
よを標吉ニ告うとも渠ハ甥え養子え養母の非を非とせみ。渠只鴨く
見れを遣らん。又が是を非とせみ。不良のまゝうと北渡さん。これも亦
量り切。かれハあやど標吉ニ告う。をもる。告うてく。嫌忌の家よ
あそぶまいよく難う。これこの如を立ちうとも。ひまうりのあふあふねど。
ひません廣光井平が存亡をうねまど。又朝夷が在如をあき。今この
一僕両友あふで孰う吾脩を客うてゐのあふんや。進退更よ空九りぬ。こ下う免
悟あそけり。と百遍悔ひ子遍悔ど。よふせんまごハありう。果せうるを黒
菴が非矣の怨ハ釋さく。又義邦を危くせり。その一條の物語ハ更よ空
第三卷ふ解分うとこそあすん。

東坡先生集卷之三

朝天巡山記

全傳
勸善二部
卷

